性悪説（荀子） 解答

A　語句の意味

(1) 人為（じんい）。（「作為」も可） ／★「いつわり・うそ」ではない。「人」＋「為（なす）」で、人が後から手を加えてなすこと

(2) へりくだって人に譲ること。譲り合い。 ／「辞」はことわる・へりくだる、「譲」はゆずる。現代仮名遣いでは「じじょう」

(3) にくむ（憎む）。 ／「疾」は「嫉」と同じで「ねたむ」。「疾悪」＝ねたみ憎むこと。①の「悪（あく）」は「わるい」

(4) 美しい音楽と、美しい色（容姿。とくに女性の美しさ）。 ／直前の「耳目の欲」と対応。耳が好むのが「声（音楽）」、目が好むのが「色」

(5) 礼の作法などのけじめと、ものごとの筋道（秩序）。 ／「文」はかざり・作法、「理」は筋道。⑫の後の「文理に合して」も同じ意味

(6) 先生（師）や手本（規範）による教化。教え導いて人を変えること。 ／「化」は、教えによって人を変えること（教化）。「礼義の道き」＝礼義による導き

B　句法

(7) 「だから・それゆえ」。前が原因・理由（生まれつきの性質に従う）、後がその結果（争奪が生じて辞譲が亡ぶ）という因果の関係。 ／★同じ「是に順ふ、故に〜」が三回くり返され、三つの性質それぞれの結果を述べている

(8) そうであるならば。そうだとすると。 ／前に述べたこと（三つの性質とその結果）を受けて、結論をみちびく言い方。⑭の後にももう一度出てくる

(9) 「必将」の二字で「かならず」と読み、「将」を再読していない。／再読する場合は「必ず将に…」と読み始め、文末を「治に帰せんとす」と読む。 ／★「必将」＝「きっと〜（でなければならない）」。再読する場合、二度目の「んとす」は文末の「帰す」まで返って読む（「帰す」は未然形「帰せ」＋「んとす」）。どちらの読みの教科書もあるので、お使いの教科書の読みで覚える

(10) そうしてはじめて。そうした後で（ようやく）。 ／「〜有りて、然る後に…」＝「〜があってはじめて…」。何が先に必要かを示す形

(11) このことから考えてみると。これによって見ると。 ／白文は「用此観之」。荀子が結論を言うときの決まった言い方で、性悪篇ではこのあとも何度も出てくる

(12) 置き字。文末で、断定・強調の気持ち（「〜なのだ」と言い切る語気）を添える。 ／「焉」「於」「而」もこの文章に出てくる置き字。読まないが、意味の上では働いている

C　指す内容

(13) 人の性 ／直前の「今、人の性、」が主題。「人間の本性には、生まれつき利益を好む性質がある」

(14) 直前の「生まれながらにして利を好むこと」。生まれつき利益を好む性質。 ／二回目の「是」は「疾悪」、三回目の「是」は「耳目の欲・声色を好むこと」を指す

(15) 争奪 ／「争奪生じて辞譲亡ぶ」。争い奪い合う心が起これば、譲り合う心は消える

(16) 「師法の化」と「礼義の道（みちび）き」 ／直前の「必将師法の化、礼義の道き有りて」を受ける。先生の教えと礼義の導きがあってはじめて、人は譲り合うようになる

(17) ここまで述べてきたこと。人の性に従えば争奪が起こって暴に行き着き、師法の化と礼義の導きがあってはじめて世の中が治まる、ということ。 ／「此を用て」＝これ（ここまでの論）を根拠にして

D　口語訳

(18) 人間の本性は悪であり、その善い部分は人為（後から人の手で作り上げたもの）である。 ／★「偽」を「にせもの」と訳すと意味が逆になる

(19) この性質（生まれつき利益を好む性質）のままに従うから、争い奪い合うことが起こって、へりくだって譲り合う心がなくなる。

(20) そうだとすると、人の本性に従い、人の感情のままにふるまえば、必ず争い奪い合うことになり、身分のけじめを犯し道理を乱すことになって、乱暴で秩序のない状態に行き着く。 ／「情」＝感情・欲望。「暴に帰す」＝乱れた状態に落ち着く

(21) だから必ず、先生や手本による教化と礼義による導きとがあって、そうしてはじめて人は譲り合うようになり、ものごとの筋道にかなって、世の中がよく治まるのである。 ／「将」を再読して文末を「治に帰せんとす」と読む教科書でも、訳はほぼ同じになる

性悪説（荀子） 解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 「偽」は「人」と「為（なす）」からなり、人が後から手を加えてなすこと（人為）をいう。「性」が生まれつきそなわっているものであるのに対し、「偽」は学びや努力によって後から作り上げたものである。 ／「其の善なる者は偽なり」＝「善は生まれつきではなく、努力で身につけたもの」であって「善はにせもの」ではない

(23) 「利を好むこと」→「辞譲」が亡ぶ／「疾悪」→「忠信」が亡ぶ／「耳目の欲（声色を好むこと）」→「礼義文理」が亡ぶ。 ／同じ形の文を三回くり返して、例を重ねて主張を強めている

(24) 人の性や情のままに従えば暴に行き着くが、先生や手本による教化（師法の化）と礼義による導き（礼義の道き）があってはじめて、人は譲り合い、世の中が治まるから。 ／★分かれめは「師法」と「礼義」。荀子は、生まれつきのままではなく、外からの教えで人を正すことを重んじた

(25) 人の性は利を好む悪なので、善は師の教えや礼義によって後から作る偽（人為）だということ。（四十三字） ／結びの「其の善なる者は偽なり」は冒頭と同じ。始めと終わりで同じ主張をくり返す組み立て

F　思想・文学史

(26) 孟子。孟子は、善は生まれつき人の心にそなわっていて（四端）、それを育てればよいと考えた。荀子は、善は生まれつきのものではなく、学びや礼義によって後から作られる（偽）と考えた。 ／孟子の説は「性善説」。出発点は逆だが、どちらも儒家で、学んで善い人になることを目ざす点は同じ

(27) 礼治主義 ／孔子の「徳治主義」、孟子の「王道政治」、韓非子らの「法治主義」と区別して覚える

(28) 法家の思想を大成した人物＝韓非（韓非子）／始皇帝に仕えた丞相＝李斯（りし）。 ／「人は放っておくと欲に流れる」という荀子の人間観が、法家の「法で人を治める」考えの土台になったといわれる。荀子は儒家、二人は法家

【現代語訳（全文）】

人間の本性は悪であり、その善い部分は人為（後から人の手で作り上げたもの）である。そもそも人間の本性には、生まれつき利益を好む性質がある。この性質のままに従うから、争い奪い合うことが起こって、へりくだって譲り合う心がなくなる。（また人には）生まれつき、ねたみ憎む心がある。この心のままに従うから、人をそこない傷つけることが起こって、まごころや誠実さがなくなる。（さらに）生まれつき耳や目の欲望があり、美しい音楽や美しい色（容姿）を好む性質がある。これのままに従うから、みだらで乱れたふるまいが起こって、礼義や、ものごとのけじめ・筋道がなくなる。

そうだとすると、人の本性に従い、人の感情のままにふるまえば、必ず争い奪い合うことになり、身分のけじめを犯し道理を乱すことになって、乱暴で秩序のない状態に行き着く。だから必ず、先生や手本による教化と、礼義による導きとがあって、そうしてはじめて人は譲り合うようになり、ものごとの筋道にかなって、世の中がよく治まるのである。

これらのことから考えると、そうであれば、人の本性が悪であることは明らかである。その善い部分は人為なのである。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる